

## マイゾウ・メーノス（まあーまあー）の世界 ブラジル

ブラジルを訪問する人、ブラジルに関心のある人にお勧めする！！

梅津久 記

### 第3話－四季がない

ブラジルというと“暑い国”というイメージがあるが、サンパウロでは、寒い6月から8月の間、コタツや電熱器を使い、もっと南のサンタ・カタリーナ州では雪も降り、日本から来られる人は想像も出来ないような気候が襲って来る。

私も移住でサンパウロに着いたのが、一番寒い7月であった、当時、サンパウロ、グアリュアリーヨスのノボ・ムンドに移住センターがあつて(現在は、日伯友好病院となつている)、移住者全員が、全ての書類の取得が完了するまでそこに入居した。とにかく夕方、日が落ちて来ると、暖かかった日中と打って変わって、急に冷え込みが激しくなり、夜には数枚の毛布をかぶって、ワラの入ったマットの敷かれた二段ベッド(なぜか今でも記憶に残っているが、綿やスポンジの入った物ではなく、寝返りをすると、ゴソゴソと音がしたものである。)にもぐりこんだものである。朝は霜が落ち、地面・芝が真っ白になっていた、また吐く息が白く、朝食をすまして、サンパウロの街に行くバスに乗るまでが寒く、襟を立て、手をポケットに突っ込んで歩いた思い出がある。

また、日本から持って来たお金を全て叩いて借りた1DKの小さなアパートと、最低限必要な家具を購入して迎えた新居での夜は寒くて、トランクだけで移住して来た私と家内は、冬服も寝具もなく、その辺にあつた全ての夏服をかぶって寝た。ブラジルってこんなに寒い国なのかとしみじみと身にしみて分かつたブラジルでの生活の第一歩であつた。

この様に日本では想像も出来ない寒い日がある。それにもっと南に行くと雪まで降る。何時だったか、仕事でパナラ州の州都クリチーバ市に仕事に行った時のこと、今日はサンパウロに帰るといふ日の夜、底冷えがして雪が降り始めた、工場のガラス窓越しに、照明に照らされてキラキラ光りながら降る雪がこんなにも奇麗だったかとうっとり見とれ、古里は福島での夜降る雪を思い出していると、一緒に行ったパウリストアーノ(サンパウロで生まれた人のこと)は、それこそビックリして窓に両手と顔をつけて、呆然と見ていた。彼にとって初めての光景だったのだろう。その夜の飛行場はうっすらと白く雪化粧され、それが空港の照明で反射されて宝石を散りばめたようにすばらしかつた。

サンパウロの気候についてももう少し述べると、一日の内に夏から冬までの四季があることである。朝、今日は暖かくなるなと思ひ、軽い洋服で出ると、日中は確かに暑くてちょうど良い具合だが、夕方から小雨とともに急に冷え込み、寒くなってガタガタ震えるくらいになってしまい、一寸油断するとすぐに風邪を引いてしまう。この様に一日に夏

と冬があるため、雨傘は離せないし、5月から11月位の間はちょっとした冬着が離せない。学生、若者を良く見るとわかるが、常に腰にカーデガンとか長袖の服を巻いて歩いている、これは流行のスタイルではなく、暑ければ腰に巻き、寒くなってきたら着るという、自然に出来た、夏冬防衛方法なのである。

サンパウロと違って、マナウスは乾季、雨季はあっても、一年中夏である。最低気温は18度、通常気温は雨季の涼しい時で22から25度くらい、乾季の暑いときは40度を超えることもある。

こんな気候であるから、アマゾンネンセ(アマゾン生まれの人)は、住宅も衣類も一年中同じ物で良い。生まれた時から、この様な環境で生活していると、「そろそろ寒くなる季節だから、冬着を出して、暖房機も準備しよう」、「さて冬も過ぎたし、暖かくなるから、冬着をしまって、暖房機も掃除してしまっておこう」と先を見て行動をする生活習慣がない。そのため、なにをするにも、その場当りの行動が多く、すぐくのんきで、明日のことなど考えない生活習慣が身に付いてしまっている。

1980年後半の超インフレで、明日買う食糧の値段もわからない緊迫した時や、1990年前半の大量解雇の時期で街角に失業者が溢れた時でも、街の中のいたる所で、道端にテーブルを並べ、そのテーブルの上には、コップを置く隙間を除いては、ビール瓶が一杯並んでいる光景を見た。「この不景気な時に、毎日、こんなにもビールが良く飲めるものだ」と感心したものである。たしかにアマゾンなら、金がなくなっても、川で魚を取って、山でバナナを取り、キャッサバ芋の粉で作ったフアリーニャ(マンジョカというキャッサバ芋の粉を鉄板で熱をかけ焙った粉)があれば食べ物には困らないし、着物はショートパンツ一枚あれば良い、裸で寝むれるのだから、たしかに「なんで、明日のことなど心配して生活しなければならないのか」ということになる。

私もマナウスに来てはじめての頃は、どんなに暑くても下着を着ていないとなんか気持ちが悪く、腹の具合を悪くしてしまいそうで下着シャツなしではいれなかった、また外に出る時は半ズボンで出る習慣が身につかず長ズボンでないと外出できなかった。30年過ぎた今では逆に肌に汗がまとわり付くのが気持ち悪く夜になっても、上は裸、下はショートパンツでないといれなくなった。外出の時もショートパンツにスリッパで出かけるほどにマナウスライズしてしまった。

—次回 第4話へ続く—